



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「想像の共同体」における近代性と宿命性の相互作用：ベネディクト・アンダーソンのネーション論再考
Author(s)	趙, 瀚雲
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 27, 71-85
Issue Date	2018-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71723
Type	departmental bulletin paper
File Information	071-086_zhao.pdf



「想像の共同体」における 近代性と宿命性の相互作用 —ベネディクト・アンダーソンの ネーション論再考—

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程
趙 瀚雲

趙
瀚
雲
ZHAO Hanyun

Interactions of Modernity and Fatality in “Imagined Communities” — Further Ponderation on Anderson’s Theory of Nation Formation —

ZHAO Hanyun

abstract

As an important part in Benedict Anderson’s theory of nation formation, Modernity and Fatality are comprised in *Imagined Communities* (1983). The dual interactions between Modernity and Fatality, which lurks behind his theory, is indispensable to the understanding of his theory of nation formation. However, few investigations on the effect of interactions has been done in the previous works. The specific contents of Modernity and Fatality were firstly introduced in this paper. On this basis, the dual interactions between them is emphatically analyzed, including the circumstances and the incurred results. The purpose of this paper, is to obtain the precise understanding and application of the theory, by analyzing the interactions between Modernity and Fatality.

1 はじめに

本稿の目的は、理論的立場からベネディクト・アンダーソンの著書『想像の共同体』¹を中心とするネーション論を再検討することで、その中に内包される近代性と宿命性の相互作用のメカニズムを解明し、彼によるナショナリズム²擁護の主張の意義を明らかにすることである。

アンダーソンは、ネーションを想像によって形成された共同体として捉え（IC：24）、その形成過程を世界史的かつ理論的に考察した。彼は社会学や文化人類学の視点に基づき、人間が如何に世界を理解するかという問題に着目し、ネーション論を進めていく。アンダーソンはナショナリズムを、「共同体に対する想像力」によって生まれた、世界認識の枠組として捉えている。彼の研究は従来の政治イデオロギーとしてのナショナリズムという見方を刷新したという（津田2016：4, 8）。今日でも、彼のネーション論は分析枠組として妥当性がある。なぜなら、現代の情報通信技術（ICT）の発達と普及によって、共同体を想像するコミュニケーション様式が変容し、人びとの世界理解にも多大な影響力を及ぼしているからだ。

このような「想像の共同体」論は、「想像」というキーワードが示すように、しばしば社会構築主義的な立場³として言及される。また、彼の「出版資本主義」は注目すべき概念である。この考え方に内包される資本主義や近代複製技術をめぐる議論から、彼は近代主義者ともいわれている⁴。

現代のナショナリズム論ではICは社会構築主義や近代主義として分類されるが、アンダーソン自身の関心は別のところにある。それは「人類学的精神（anthropological spirit）」に基づく生の可能性をめぐる議論である（IC：24）。彼の主張するネーションの想像力は、生と死に意味を付与するという役割を果たす。こうしたネーションは、形式的には空虚な構築物としての性格を有するが、その内実は人びとの生と死に意味を与えることである。そのような視点から、彼はナショナリズムの意義を積極的に評価するのである。

このことから、アンダーソンのネーション論を、ナショナリズムの発生への問いというよりも、さらに広い文脈や大きな視点に基づいて思考することが必要となる。というのは、近代における人びとのアイデンティティ、共同体のライフスタイルや生き方などの変容過程には、資本主義や近代複製技術などの近代的な要素のみならず、生の偶然性と死の必然性、及び言語の多様性、という宿命的な要素も大きな影響を与えるからである。そこで本稿は「想像の共同体」論における近代性と宿命性の相互作用に注目することで、アンダーソンのネーション論をより精確に再考察する。このような議論は単なるアンダーソン理解にとどまらず、メディアとコミュニケーションが急激に変容する時代における共同体の「想像」のあり方の新しい可能性についても示唆を与えてくれるだろう。

本稿は三つの部分から構成されている。第2節で、「想像の共同体」論にお

▶1 以下、『想像の共同体』はICと表記する。この本よりの引用を、ICと邦訳の定本版（2007）のページ数の形で示す。

▶2 アンダーソンはネーションを「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体」として定義づけるが、ナショナリズムについては明確に定義していない。本稿において、「想像の共同体」論の文脈に沿って、ナショナリズムを「ネーションという共同体への志向」を表す用語として使う。

▶3 この点について、津田（2016）の議論が参考になる。彼は、「アンダーソンは人口調査や地図、博物館が国民共同体に対する想像力を喚起するにあたって重要な役割を果たしていると論じているが、それはまさに国民共同体の存在を所与とする現実像が構築される過程だと言い換えることができる」（津田2016：100）と述べ、アンダーソンを社会構築主義的な立場と言及している。

▶4 たとえばスミス（1999）は、「想像の共同体」としてのネーションが「経済的な需要」のみならず、「心理的な欲求」をも満たすものであるが、出版資本主義を近代的な条件として捉えたうえで、アンダーソンを近代主義者として認めている（スミス1999：12）。

ける近代性と宿命性について分析する。第3節で、先行研究で提示された近代性と宿命性という視点から、本稿の方法論を示す。これらの先行研究を手がかりとして、第4節で二重の相互作用という考え方を導入し、アンダーソンのネーション論を再考する。

2 「想像の共同体」論における近代性と宿命性

2.1 近代性

近代化(modernization)の概念は多層的な意味を持つ。富永(1987)は二つの並列する近代化の概念を提示する。一つは、近代化を一つの「総括概念」として捉えることである。この概念は「近代的」という意味を中心とし、近代における社会、文化、技術、経済など多様な側面の変容を含む。もう一つは、近代化を一つの「部分概念」として捉えることである。この概念は主に社会的、文化的な側面の変容を中心にする(富永1987:16)。本稿における近代化の概念は、前者の「総括概念」を用いることとする。

三溝(1993)は『新社会学辞典』の「近代化」の項目において、近代化は単一の指標ではなく、一つの「複合的な概念」とであると説明している。この理解は富永(1987)による「総括概念」と親和的であるが、いくつかの他の要素も含まれている。ICと親和性が高いのは、「社会形態ないしは人間関係のあり方」と「産業化」という二つの近代化の含意である(三溝1993:319)。前者は、個人が自律という前提のもとに、自発的に関係を結成する、という社会的つながりを、近代的現象として捉えることができるという。そして後者は、近代化の経済的な側面である。

この二つの要素は近代化における社会的含意と経済的含意として捉えることができる。それは「想像の共同体」論における近代的な性格にも通じている。「想像の共同体」論における近代性を「ネーションを近代的現象として扱うこと」⁵とすると、二つの含意に対応する形で次の二点を指摘することができる。

①近代における新しい世界理解の様式(modes of apprehending the world)と②資本主義・近代複製技術である(IC:47,82)。前者は、近代における共同体の想像の様式にかかわる社会的含意を持つ。後者は、近代化における経済原理と技術的成果として、経済的含意を有する。

まず、近代における新しい世界理解の様式について、アンダーソンは「文化システム」(IC:35)という概念を分析することで解明する。「文化システム」とは、共同体の想像力と時間観念に依拠し、人びとにアイデンティティを与えることで生と死に意味を付与する役割を果たす。彼はネーションを「宗教共同体」と「王国」と並んで、「文化システム」として認識すべきだと主張する(IC:34-35)。

中世後期までに「宗教共同体」と「王国」が支配的な「文化システム」として存在した。旧来の世界理解の様式は、この二つの「文化システム」にも

►5 アンダーソンは、「近代的現象」と「古い存在」という二つの側面をネーションの一つの「パラドックス」として指摘する(IC:22)。

たらされた言語と王権の垂直的で階層的な権力構造によって維持されている。ところが近代の世界探査、聖なる言語（ラテン語）の格下げ、そして神聖君主の正統性の衰退という三つの近代的条件とともに、この世界理解の様式は中心的地位から退場していく（IC：39, 42, 45）。

そのかわりに、新しい世界理解の様式が芽生えた。近代の小説と新聞の基本構造から新しい時間観念が見出され、この新しい世界理解の様式を受容する装置となっていく。彼は「横断的で、時間軸と交叉し、（中略）時間的偶然によって特徴付けられ、時計と暦によって計られる」という新しい時間観念を、ベンヤミンの言葉を借用して、「均質で空虚な時間」と呼ぶ。「均質で空虚な時間」は、旧来の、未来に成就される「即時的現在における過去と未来の同時性」という垂直的な「メシア的時間」と対置される（IC：49-50）。「メシア的時間」は旧来の「文化システム」の時間的な表象である。それに対し、「均質で空虚な時間」は垂直な時間軸（通時性）を横断する水平的な平面（同時性）を持ち、新しい「文化システム」の基礎——「均質で空虚な時間のなかを暦に従って移動していく」共同体の観念——の形成を促す。こうした新しい時間観念と新しい共同体様式は、新しい世界理解の様式を構成していく。

次に、資本主義・近代複製技術は、彼の提起した「出版資本主義」の概念から見出される。「出版資本主義」は近代における新しい共同体の想像を促進する条件だとされる（IC：63）。そして、資本主義と近代複製技術は、「出版資本主義」の重要な構成要素である。資本主義は近代化の経済的規範であり、資本主義の市場原理は利益と市場の拡大を求める。さらに、近代複製技術は効率追求のためのコミュニケーション技術の革新の成果として、出版物の大量生産／複製を可能にする。その結果、書籍出版は「初期の資本主義的企業のひとつ」（IC：76）として出版市場を拡大していく。そして商品である出版物——本（小説）、新聞を消費することが、共同体を想像するという行為を可能にしていく。

以上のように、ネーションの形成に関する世界認識と技術的手段から近代性を抽出することができる。アンダーソンのナショナリズム論を分析する場合、この二つの点に焦点が当てられている。だが重要なことは、彼の生をめぐる関心である。次に彼の主張する宿命性について議論を進める必要がある。

2.2 宿命性

アンダーソンが論じる「文化システム」の概念は生への意味付与の問題につながっている。この問題は、資本主義及び科学技術などでは完全に克服できない。こうした不可避的で超越的な特徴は、宿命性と呼ばれ、世界理解の様式の深層に横たわっている。この宿命性は以下の二つの事象を通じて現れてくる。

第一に、人間が避けては通れない生と死の宿命性がある。旧来の宗教や王国は人間の生と死をめぐる様々な体験に解釈を与えることで、生と死に意味を付与してきた⁶。だが近代において、宗教や王国が衰退し、「文化システム」の断絶が生じた。この断絶された場所では、生と死の宿命性に意味付与を果たすものはなくなる。このような背景から生まれた新たな「文化システム」

▶6 メレディス・B・マクガイア（2008）は、宗教が人間の体験に意味を与える能力を持つと指摘する。また、彼は「意味」という用語を「何らかのより大きな準拠枠の視点からの状況と出来事に対する解釈」とであると説明する（マクガイア2008：53）。

- ▶7 アンダーソンは、このような「国民的想像力」が「無名戦士の墓と碑」という場所で強く現れてくると指摘する (IC : 32)。

- ▶8 注目に値するのは、アンダーソンが、言語の多様性という宿命性をイデオロギー的な意味ではなく、「手の施しようのない言語的多様性という一般的条件」 (IC : 83)、つまり生にかかわる客観的な現象として考察されていることである。

としてのネーションは、生と死をめぐる体験に解釈を与え、それを有意味なものにし、生と死の連続性を人びとに感じさせる「国民的想像力」⁷を生む。

この点についてアンダーソンは以下のように論ずる。人生は偶然に満ちているが、結局、必然的に死を迎える。「偶然と必然の組み合わせに満ちている」人間の生は、「病い、不具、悲しみ、老い、死といった人間の苦しみの圧倒的重荷」を負わざるをえない。従来の宗教はそういう状況に応答してきたが、「啓蒙主義」や「合理主義」などの近代的思想の流行りとともに、「宗教的思考様式」の支配的な力が減衰していく一方、「進化論的／進歩主義的思考様式」は生と死の宿命性に「沈黙でしか答えない」ことになる (IC : 33-34)。人間が直面しなければならない超越的で不可避的なアポリア——生と死の宿命性は、世界理解の様式の転化の過程における根本的な背景として、共同体の想像力の変化を促していく。

第二に、言語の多様性という宿命性⁸がある。アンダーソンは次のように述べる。

積極的な意味で、この新しい共同体の想像を可能にしたのは、生産システムと生産関係（資本主義）、コミュニケーション技術（印刷・出版）、そして人間の言語的多様性という宿命性のあいだの、なかば偶然の、しかし、爆発的な相互作用であった。

ここで、宿命性の要素は、決定的に重要である。というのは、資本主義にいかなる超人的偉業が可能であるにせよ、死と言語は、資本主義の征服しえぬ二つの強力な敵だからである。特定の言語は、死滅することもある。しかし、人類の言語的統一はこれまでもできなかったし、これからもありえない。 (IC : 82-83、傍点引用者)

ここでアンダーソンは、資本主義・近代複製技術と言語の多様性との間の「相互作用」を強調している。資本主義・近代複製技術は地域方言の差異を排して、言語を一元化する推進力を持つが、言語の多様性によって、「人類の言語的統一」が不可能である。こうした資本主義に「征服」されえないという一面は、言語の多様性の宿命的な性格を露わにする。

さらに彼の言語の原初性をめぐる議論は、言語の多様性の宿命的な性格を一層明らかにする。「いかなる言語であれ、ひとはだれも、言語がいつ生まれたのか、その誕生日を知ることはできない。それぞれの言語は、地平なき過去からぼうっと浮き出てくる。(中略) 言語ほど、我々と死者を感情的に結びつけるものはない」 (IC : 238)。つまり言語は、過去へ無限に遡る超越的な性格を有する。しかしながら、このことは同一言語に限ったことである。異なる言語間では、この超越性は理論的に不可能である。

そして、アンダーソンは人間の生の限界について次のように説明する。「言語は排斥の手段ではない。原則として、誰でも、どの言語でも学ぶことができる。それどころか、言語は本質的に包摂的であり、誰もすべての (傍点原著者) 言語を学ぶほど長生きすることはできないという、あのバベルの宿命だけによって制約されている」 (IC : 211)。つまり、現実的に「人が他者の言

語に入っていくことを制限するのは、(中略) 人生には限りがあるからである」(IC: 243)。

それゆえ、多様な言語の統一が理論的にも、現実的にも不可能なのである。言語の多様性は、人間の力では克服されえない超越性を持ち、不可避的なものであるために、その宿命性は自明なのである。

3 先行研究——近代性と宿命性の展開

3.1 近代性と宿命性の妥当性について ——三つのアプローチの接合による可能性

近代性と宿命性は「想像の共同体」論に内包される不可欠な要素として考えられる。この点については、原 (2014) によるナショナリティ生成の分析枠組に関する研究を援用し、明らかにする。彼の分析枠組から近代性と宿命性の輪郭が現れてくる。

原はナショナリティの生成について、原初主義、近代主義、そして社会構築主義 (= 社会構築主義)⁹という三つの主要なアプローチがあると指摘する¹⁰。原初主義では、ネーションは太古から所与された存在であり、ナショナリティは言語や伝統などの原初的要素とのつながりから生じるとする。近代主義では、ナショナリズムの形成を主に思想、経済、政治の近代化によってもたらされるものとし、近代化とともにナショナリティの生成が促されると主張する。そして社会構築主義では、ネーションやナショナリティを言説によって構築されたものとして考える。

原によれば、重要なことは、ナショナリティの生成がこの三つアプローチの接合／相互補完によって実現されていることだという。まず原初主義の場合、人間が生まれ落ちた世界の言語、文化、慣習などの原初的要素を理解するためには、間主観的な解釈が不可欠である。一方、なぜネーションが近代に登場するのかを明らかにするために、不可避免地近代主義の観点が必要となる。つまり、原初主義は社会構築主義と近代主義に補完されていることになる。また近代主義の場合、ナショナリズムの形成は人びとの間主観的な解釈の上に成り立つものであるが、ナショナリティの独自性を主張する際に、原初的要素の影響も無視できない。したがって近代主義は原初主義と社会構築主義に補完されていることになる。最後に社会構築主義の場合、ナショナリズムを一種の言説として捉えるが、どのような理由で特定の時期や地域で独自性をもって誕生したのかを説明できない。すなわち社会構築主義は原初主義と近代主義に補完されている (原2014: 189-194)。

三つのアプローチの相互補完的な関係性に基づいて、原は次のような枠組を提示する。それは、社会構築主義を主要なアプローチと位置づけ、原初主義的アプローチと近代主義的アプローチを「適宜接合する」枠組である (原2014: 194)。この枠組において、原初主義は言語、儀礼、習慣などの歴史的

▶9 原 (2014) は「社会構成主義」という用語を用いる。「社会構成」とは、ネーションやナショナリティがナショナリズム言説に構成されることを指す (原2014:192)。一方、津田 (2016) は「社会構築主義」という用語で、権力制度 (人口調査、地図、博物館) が国民共同体を一種の現実として構築する、とアンダーソンの議論を説明する (津田2016: 100)。ここで、「言説／制度」を通して「国民意識／共同体」を築き上げる、という意味を表す場合、「社会構成主義」と「社会構築主義」を同義的に捉えられる。それゆえ、本稿では「社会構成主義」と「社会構築主義」という二つの言葉を同義的に捉え、区別せずに用いる。後文で、「社会構築主義」で統一する。

▶10 たとえば原 (2014) は、ネーションの所与性と原初性を強調するC・ギアーツ、E・シルズ、S・グロスビーらを原初主義の代表的な論者として挙げる。近代主義の論者については、近代化の結果としての産業化、格差的社会、近代的国家制度を論じたE・ゲルナー、T・ネアン、ブルイリーとM・ヘクターらを挙げる。そしてアンダーソンを典型的な社会構築主義の論者として提起したが、ほかには、H・バーバ、M・ビリッグらをも挙げる (原2014: 189, 190, 193)。

- ▶11 原は、ナショナリズム言説を「『○○人』を想起させる言説」として説明し、それが「メタファー、ナラティブ、レトリック」という形で、様々な「対話のプロセス」を通してナショナリティを構築する、と論ずる(原2014:195-198)。
- ▶12 ここで津田(2016)の指摘を再び取り上げたい。彼は「想像の共同体」を「認識的ナショナリズム」として捉える。この考え方にも、「想像の共同体」論における近代性と宿命性を見出すことができる。「認識的ナショナリズムとは、見ず知らずのひととを文化や言語等の共通の属性を有する『同胞』として想像し、そうした同胞の集合を明確な境界線を有する単一の共同体と見なす認識の枠組みを意味する」(津田2016:85)。この概念において、共同体の属性は(宿命的な)文化と言語によって決まる。ただし同時に、想像行為自体が「自己と同時並行的に活動する無数の同胞を想像させる時空間意識の獲得」ではじめて実現される(津田2016:85)。このような認識的ナショナリズムには、文化や言語という宿命性の側面と、「自己と同時並行的」すなわち水平的で均質的な「時空間意識」という近代性の側面との関連性が暗示されている。
- ▶13 アンダーソン(2003)は、ナショナリズムにユートピア的な性格が内包される可能性を認め、またそこにこそ、ナショナリズムの価値が見出されうると述べる。「私の古典的ナショナリズムへの擁護がユートピア的だと言うことはおそらく正しい。だが、このナショナリズムが価値なしとすることには同意できない。このユートピア主義が、つまり『虹を超えて』限りなく遠ざかる地平線のユートピアがまさに、ナショナリズムを価値あるものとする私は考える」(Anderson 2003:240、新倉2016:50)。この点について新倉は、ユートピア的な性格がもたらしたのは、到達できない対象へ接近しようとする実践の反復であり、その中に価値が見出される、とも説明する(新倉2016:50)。

な文脈で、ナショナリズム言説¹¹に独自性を付与する。近代主義は産業化、近代国家制度などの社会的な文脈の変容で、特定のナショナリズム言説の出現の時期と場所の独自性を解釈する(原2014:199-201)。つまりこの枠組は、社会構築主義アプローチに原初主義と近代主義という二つのアプローチが同時に内包されている、という合体の構造を提示している。

さらに原によれば、アンダーソンの議論は、新聞や小説における言説を通して共同体を想像するという意味で、典型的な社会構築主義だという。そうであれば、原のいう合体の構造は「想像の共同体」論における宿命性と近代性を暗示しているといえる。このことは以下の二点から説明することができる。

第一に、原初主義のアプローチは「想像の共同体」論における宿命性を内包する。言語、伝統などの原初的要素は、人間が選択することができないものであり、近代的規範及び技術などで克服できない特性を持つ。この点から考えれば、原初主義自体には人びとの生と死の宿命性、そして言語に含まれる宿命性が内包されているといえるであろう。

第二に、近代主義アプローチと、「想像の共同体」論における近代性とは、近代化という前提を共有している。新しい共同体の様式と時間観念は、「啓蒙主義」や「合理主義」(IC:34)の時代の産物であるゆえ、近代化における社会思想的な側面を持つ。つまり近代主義による思想の近代化は新しい世界理解の様式の背景となっていく。さらに、資本主義・近代複製技術は、近代化における経済的な成果として考えられ、近代主義アプローチにも通じている。

以上のように、「想像の共同体」論に内包される宿命性と近代性の視座は、原の論じる社会構築主義を中心とする三つのアプローチの接合枠組と親和的である¹²。原初主義と近代主義との(社会構築主義の範囲における)相互補完の関係を議論した原の研究に準拠することで、「想像の共同体」論における近代性と宿命性を説明することができた。しかしながら、近代性と宿命性の相互作用を明らかにするためには、更なる議論が必要である。そこで、新倉(2016)の中間性の理論を取り上げる。

3.2 近代性と宿命性の間にあるネーション ——中間性理論の構図に基づいて

新倉(2016)は、「想像の共同体」論の核心は、ナショナリズムを近代固有の文化として考察することだと指摘する(新倉2016:44)。そこで、彼は中間性の理論を提示する。この理論は、本稿にとって近代性と宿命性の相互作用を分析するための有効なフレームを提供してくれる。

まず、彼のアンダーソン理解から見ておくと、以下の三点に要約できる。①アンダーソンはナショナリズムを世界理解の様式だと解釈する。②この意味でのネーションはユートピア的な性格を有する。③アンダーソンはこうしたネーションから善性／価値¹³を見出し、ナショナリズムを擁護する姿勢をとる(新倉2016:46-47,50)。

新倉は中間性の理論を用いて、アンダーソンのネーション論を説明する

(図1)¹⁴。新倉はネーションを中間のものとして考えている。というのは、ネーションはユートピア的な性格があるゆえに、未完のままでありつづけるからである。アンダーソンの出版語をめぐる議論から、ネーションは普遍(ラテン語)と特殊(俗語)の間に成立する。そしてネーションは、近代の「均質で空虚な時間」の中を動いていくゆえ、過去と未来の間に存在するものでもある(新倉2016: 50-51)。

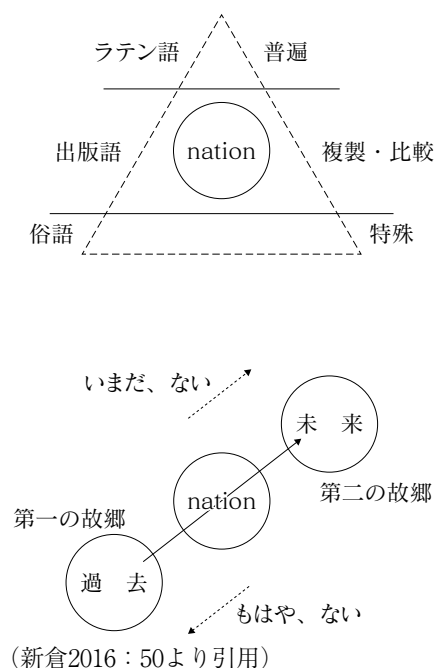
さらに彼は、ネーションの中間性が個人のレベルにおいて、様々な局面で経験されていると指摘する。たとえば植民地の場合、近代化を先取りするエリートたちは、伝統の故郷から「疎外」される。

同時に、彼らの「教育的巡礼と行政的巡礼」(IC: 218)が植民地の範囲までに限定されるため、それより先の帝国の首都への「巡礼」¹⁵は阻まれるゆえに、帝国からも「疎外」される。新倉はこのような個人の経験を「二重の疎外」と呼ぶ(新倉2016: 52-54)。このように、個人の生も、ネーションの中間的な構造的特徴とつながっていく。

この中間性の理論枠組によって、近代性と宿命性も説明できる。「特殊と普遍の間」の図では、資本主義・近代複製技術によって出版語は俗語の特殊性を克服して、(ラテン語のような)普遍的地位を求めるものの、言語の多様性(による独自性や個別性)によってそこには到達できない。次の「過去と未来の間」の図では、この時間軸は、新しい世界理解の様式の時間観念を表していると同時に、生と死の宿命的な連鎖関係を解釈することもできる。ネーションは、近代的なものに至ろうとしながら宿命的なものからも制限されているのであり、近代的な形式で宿命的なものを解釈するものである。すなわち、新倉の中間性理論から、ネーションは「近代的要素と宿命的要素の中間にあるもの」として成立し、そこには近代性と宿命性が含まれる、という結論に至る。

ただし、新倉の理論は近代性と宿命性について言及しているが、両者の相互作用を説明するものではない。そこでアンダーソンのネーション論における相互作用を考察するために、ネーションを近代性と宿命性の「中間」に位置づけながら、複眼的視点で再考する必要がある。

■図1 ネーションの位置



▶14 図1に示される用語「もはや、ない」と「いまだ、ない」、そして「第一の故郷」と「第二の故郷」に関しては、新倉による「文化」と「ミドルクラスの経験」をめぐる議論を参照のこと(新倉2016: 55-56)。

▶15 ICによれば、帝国と植民地の位置関係は、「中核——周辺」という構図で示すことができる(IC: 218)。こうした位置関係を前提に、植民地の視点から見れば、帝国が「聖なるもの」として現れる。さらにアンダーソンはネーションを「宗教に取って代わったもの」として考えている。この意味で、教育的あるいは行政的な理由により植民地から帝国へ赴くことを、アンダーソンは「巡礼(聖なるものへの移動)」と宗教的に喩えている。

4 近代性と宿命性の相互作用

4.1 相互作用のプロセスについて

「想像の共同体」論における近代性と宿命性との相互作用は次の二つの側面から見出される。一つは新しい世界理解の様式という近代性と、生と死の宿命性との相互作用であり、もう一つは資本主義・近代複製技術という近代性と、言語の多様性という宿命性との相互作用である。アンダーソンはICにおいて、後者の「相互作用 (interaction)」を指摘するが (IC: 82)、この相互作用は前者においても生じていると筆者は考える。そこで、後者の近代性と宿命性の相互作用を次のような一般化したプロセスとして提示する。①近代性から宿命性への作用が生じる。②宿命性から近代性への反作用が生じる。③その結果として、ネーションをめぐる想像が生まれる。

ここで重要なのは「作用、反作用、結果」というプロセスである。彼は近代化と連動する生の様式の変容に注目するゆえ、近代性の作用を独立変数として最初に観察し、次に宿命性の反作用を従属変数として観察している。

4.2 神に見捨てられた世界へ——「新しい世界理解の様式」と「生と死の宿命性」との相互作用

「想像の共同体」論のネーションは、人びとに生の意味を付与するという役割を果たす。ネーションによる生の意味付与は、新しい世界理解の様式と生と死の宿命性との間の相互作用で可能となる。

宗教や王国の共同体による生への意味付与は、「メシア的時間」の垂直的な同時性に依存する。すなわち、この時間観念の支配のもとに、宗教（キリスト教）による救済の意味が受け入れられるのである。さらにこの時間観念に依存する権力は、垂直的な構造として現れ、その頂点にいる「神」に担保されている。このような権力の構造は、神聖君主に対して正統性の居場所を提供する。宗教や王国に付与された意味によって、生と死の宿命性は解釈され、人びとに受け入れられる。このような「解釈」によって、生と死の宿命性が、意味のあるものへと転換する。

「メシア的時間」は近代化とともに、人びとを支配することが難しくなると同時に、宗教や王国による生への意味付与も危ういものとなる。この時点で、「神」からの救済——宗教や王国に付与された意味は、もはや生と死の宿命性を転換するものとして期待できなくなる。その代わりに登場してきたのは「均質で空虚な時間」と、水平的で均質な共同体を想像する潜在力である。こうした想像の潜在力——「新しい共同体の想像力」と呼ぼう——は「均質で空虚な時間」の中に孕まれている。ただし初期の段階では、この想像力は潜在的な力であり、(宗教や王国のような) 意味付与の様式として定着していないため、近代の喪失が生まれてくる。というのは、生と死の宿命性は、意味付与をされない状態のまま、「均質で空虚な時間」の中で漂流しつづける

ことになり、この状態は一種の不安¹⁶を孕むからである。これにより、近代の人びとにとって、「むき出しの生」が現れてくる。というのは、人間の生の体験に意味を付与するという宗教の機能が期待できなくなり、人間の生は何にも支えられない状態となるからである。ここで、生と死の宿命性が意識化され、意味が喪失された形で現れてくる。「均質で空虚な時間」という新しい世界理解の様式は、旧来の「メシア的な時間」を無力化し、生と死の宿命性を、そこにある不安を引き起こすことで近代の人びとに可視化する作用をもたらす。

次に反作用のプロセスが発生する。以上のような生と死の宿命性が新しい世界理解の様式によって可視化されたことは、「人間の苦しみの圧倒的重荷」に対し近代的思想では十分ではないこと、すなわち「近代性がこれらの事態に対応できないということ」を暴いていく（IC：33）。この反作用のプロセスによって、近代的思想の無力さが現れてくる。逆に言えば、この反作用が発生するまでは、近代的思想の無力さが隠蔽され、不可視でありつづけていたことになる。

その結果、「そこで要請されたのは、運命性を連続性へ、偶然を有意味なものへと、世俗的に変換することであった」（IC：34）。ここで社会的に要請されるのは、新しい世界理解の様式に適する『「水平・世俗的、時間・横断的」タイプの共同体』（IC：76）であり、生と死の宿命性をめぐる新しい解釈でもある。この解釈によって、新しい共同体の様式は人びとに生の意味を付与する。典型的な新しい共同体の様式として、「植民地国家からの系譜」を持つ「人口調査、地図、博物館」という「権力の三つの制度」が挙げられる（IC：274）。この三つの制度はネーションの新しい想像の様式としての特徴を次のように表現している。すなわちこれらの国家的制度から、ネーションを「複製可能」な「シリーズ」として、かつ過去へ遡ることができる「歴史的時間」を持つものとして認識することが可能となる（IC：301）。

新しい世界理解の様式と、生と死の宿命性との相互作用で、「文化システム」が断絶し、そこからネーションの場所が生じる。ただしそれだけでは、ネーションの様式が決定されない。というのは、ネーションは同一言語で相互予期的に想像される共同体であるからだ。それをもたらすのは、資本主義・近代複製技術と言語の多様性との相互作用である。

4.3 新しい想像の空間の胎動——「資本主義・近代複製技術」と「言語の多様性」との相互作用

資本主義は、利益の追求を基本的な欲望とし、市場拡大の原理をもたらす。そして近代複製技術は、新聞と書籍の大量複製／生産を可能にした。この二つの条件のもとに、出版物のラテン語市場が飽和すると、俗語・口語の市場が求められるようになる（IC：77）。これは、出版物の市場の拡大の過程であり、資本主義・近代複製技術が言語の多様性を一元化しようとする作用のプロセスでもある。その結果、一元化された言語を使う「読書公衆」が創出された。「読書公衆」の形成によって、異なる言語を使う集団間の「相互了解の不可能性」は可視化され、新しい共同体の想像を可能にする（IC：

▶16 アンダーソンは以下のように「不安」を描き出す。「宗教信仰は退潮しても、その信仰がそれまで幾分なりとも鎮めてきた苦しみは消えはしなかった。楽園の崩壊、これほど宿命を偶然と感じさせるものはない。救済の不条理、これほど別の形の連続性を必要とさせるものはない」（IC：34）。

82-83)。つまり、資本主義・近代複製技術は、言語の多様性を一元化することで、そこに孕まれる「相互了解の不可能性」を可視化するように働いた。

しかしながら市場原理によって、出版市場は拡大しつづけるが、ある一定のところまでたどりつく歯止めがかけられる。というのは、出版語の、物理的な範囲はもちろんのこと、想像上の範囲は、結局、言語の多様性に制限されることになる。言語の多様性は、資本主義・近代複製技術からの作用に対し、相互了解の範囲に制限をかけていく、という反作用をもたらす。すなわち、言語の多様性の可視化は反作用として、出版市場（資本主義・近代複製技術の拡張）を限定する。

こうした作用と反作用のプロセスを経て、「出版資本主義」は出版語という形で現れる。アンダーソンによれば、出版語は、以下のように国民意識の基礎をもたらしたという。

第一に、出版語は一つの「交換とコミュニケーションの統一的な場」を作り出した。この場において、特定の言語を使う人びとが互いに国民として想像する。この想像の様式に関して彼はこう述べている。「かれらは、かれらのこの特定の言語の場には、数十万、いや数百万もの人々がいること、そしてまた、これらの数十万、数百万の人々だけがこの場に所属するのだということをしだいに意識するようになっていった」（IC:84、傍点原著者）。すなわち、こうした想像の行為は「相手＝同胞の存在」を想像するのみならず、「相手＝同胞が逆に自分のことを同胞として想像すること」をも想像している、という双方向的で、入れ子構造の相互予期の行為である。こうした相互的な想像が、ネーションの基本的な想像の様式を構成することになる。第二に、「永続的形態」を持つ印刷物によって、出版語は言語に時間的かつ空間的な固定性を与えた。理論的には、こうした出版語は無限に複製することが可能であり、さらに印刷物の形態で時間的・空間的な拡張が可能となる。その結果、同一の言語による時間的・空間的均質化が進行していく。第三に、出版語の固定化によって、出版語と方言の上下関係が生じるようになる。出版語は、（同様な言語を使う）共同体の共同の言語として正統性が認められる。それに対し方言は従属的な地位に甘んじることになる（IC:84-85）。

資本主義・近代複製技術という近代性と言語の多様性という宿命性との間の相互作用の結果として、①相互予期的な想像、②言語の時間的・空間的定着と複製、③正統的出版語と従属的方言という三つの特徴を持つネーションの想像の様式とその形成過程が明らかになった。このプロセスはモデルとして、近代の様々な地域で繰り返されていく。

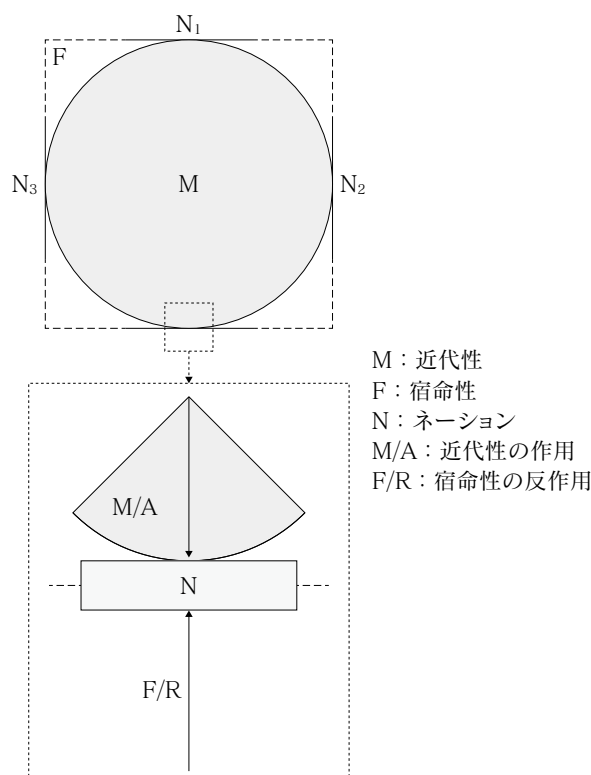
4.4 二重の相互作用とネーション

以上の考察を踏まえて、近代性と宿命性の二重の相互作用とネーションの形成との関連をまとめると次のようになる。

まず、新しい世界理解の様式と、生と死の宿命性との相互作用は、新しい共同体の様式の形成を促す。それは新しい世界理解の様式に適する一方、生と死の宿命性に解釈を与えることで生の意味を人びとに付与する。この相互作用は、生の意味付与の問題と正面から向き合わざるをえないがゆえに、ネー

ションの想像のための認識論的な条件¹⁷となる。次に、資本主義・近代複製技術という近代性と、言語の多様性という宿命性の相互作用は、「出版資本主義」をもたらし、その結果として、出版語が国民意識の基礎を築くことになる。この相互作用は、ネーションの想像の（そのあとモデル化され、模倣される）基本的な様式を作り出すため、ネーションの想像のための社会構造的な条件となっていく。

■図2 近代性と宿命性の相互作用



近代性と宿命性の

相互作用のプロセス——作用、反作用、結果——を、次のように概念化することができる（図2）。拡張のベクトルを持つ近代性（M）は、最初の段階で、それを囲む宿命性（F）の閾値へ接近しつづけている¹⁸。閾値に達すると、近代性と宿命性の相互作用のプロセスが発生する（FとMの接触の実線部）。

最初に発生するのは近代性から宿命性への作用（M/A）である。この段階で、近代性は宿命性を「近代の喪失と不安」及び「相互了解の不可能性」として可視化していく。可視化された宿命性は、次に反作用（F/R）を生み出す。宿命性は、「近代性が生と死の宿命性に対応できないこと」と「言語の明確な範囲」という制限を顕在化することで、近代性の限界をも可視化していく。その結果、近代性と宿命性の相互作用は一つの可視的／制限的な場所を生み出すことになる。ここにおいてネーション（N）は観察されうる。このようなネーションはモデルとなり、いわゆる「海賊行為」（IC:136）によって、様々な地域において模倣される（N₁、N₂、N₃…）。「海賊行為」は、異なる地域におけるそれぞれのネーションの形成のより大きな文脈——世界範囲——における近代性と宿命性の相互作用の結果として捉えることができる。

まとめとして、以下の結論が得られる。アンダーソンが議論するネーションの形成において、近代性と宿命性はいずれも不可欠である。両者は並列的な要素ではなく、その相互作用のプロセスを看過すると、ネーションに内包されるダイナミズムを捉えられなくなり、「想像の共同体」としてのネーションを読み解くことが困難となるであろう。

▶17 IC中訳（呉観人、訳（2011）《想像の共同体—民族主義の起源と散布（増訂版）》上海人民出版社）の訳者まえがきに、本節で論じた近代性と宿命性の二重の相互作用についても言及されている。呉（2011）は、「過去の認識論的断絶（『文化システム』の断絶）」と「資本主義、印刷技術、言語の多様性という三者の相互作用」を、「認識論的な条件」と「社会構造的な条件」として論じ、「（これらの）認識論的な条件と社会構造的な条件はそろってはじめて、国民共同体の様式が醸成され、さらに現代のネーションの舞台が用意された」と述べる（呉2011：8-9、原文中国語、引用者訳、括弧内引用者）。

▶18 近代性が最初に宿命性の閾値へ接近しつづけていくと想定することは可能である。というのは、特に新しい世界理解と時間観念と旧来のものの「交代」は、近代化のプロセスの視点から考えても、決して一つの爆発的な過程ではないからである。この段階について、アンダーソンは次のように指摘する。近代的な科学（近代複製技術、産業革命など）の発展は新しい同時性の観念をもたらしたが、それが徐々に成立してきた過程であり、そしてまだ十分に研究されていないという（IC：49）。

4.5 アンダーソンにおけるネーションとナショナリズムの概念

アンダーソンは、ネーションが意味付与の役割を果たすこと、すなわちネーションのもたらす価値の生成を評価している。この点において彼はネーションへの志向性、つまりナショナリズムを擁護する。しかし、アンダーソンのナショナリズム擁護の主張はしばしば、イデオロギーとしてのナショナリズムを擁護することと誤解されてしまう。それゆえ、彼のナショナリズム擁護をより掘り下げて理解するために、前述した相互作用の議論に基づく次の二つの視点が必要である。

- ▶19 たとえば彼はこうした価値を「ゲマインシャフトの美」と呼び、「無私無欲の後光」という価値を有する（IC：236）。さらに『比較の亡霊』でも、彼は「ネーションの善性」を一つの超越的な価値として論ずる（アンダーソン2005：569-582）。
- ▶20 「共通のプロジェクト」について、アンダーソン（2016）は以下のように提起する。「ナショナリズムとは、古の歴史から引き継いだ何かではなくて、むしろ現在と未来のための『共通のプロジェクト』である」（アンダーソン2016：27）。さらに、「ナショナリズムが現在と未来に向けての共通のプロジェクトであるとするならば、最終的にナショナリズムが達成されることはありえない」（アンダーソン2016：28）。

第一に、ネーションのユートピア的な性格、すなわち「価値¹⁹を継続的に生成するもの」に関する理解が必要である。この問題は、二重の相互作用の視座からはじめて、動的かつ可視的に捉えることが可能となる。前述のように、近代性と宿命性の二重の相互作用を考察することで、ネーションによる生の意味付与を解明した。この意味でネーションは一つの希望や理想となり、その中に価値が見出されることが可能である。さらに、アンダーソンはネーションを未完である「共通のプロジェクト」²⁰として捉える。彼は人間の大量移動とコミュニケーションの変容を、現代のナショナリズム問題の背景として指摘する（アンダーソン2005：42）。そして東南アジア研究、ポストコロニアル理論研究学者のCheah（2003）は、資本の一つの形態としての「エントロピー（entropy）」の概念でこうした背景を一般化する。Cheahは、こうした背景に一種の「静止できないエネルギー（incessant movement and restless energy）」が内包され、「エントロピー」の形で、ナショナリズムという文法（すなわちナショナリズムの形成様式）の基盤を提供すると同時に、それに不安定な状態／性格をも付与すると述べる（Cheah 2003: 4-5）。この「エントロピー」の概念は資本の「静止できない」かつ拡大しつづける動的な性格を有し、本稿における近代性（資本主義）と親和的である。それゆえ、この「エントロピー」に内包される「静止できないエネルギー」を、近代性と宿命性の相互作用を通じてもたらされるネーションの「未完のプロジェクト」の要因として考えられる。さらにこの未完であることによって、宿命性が近代性の限界を露わにし、そのことがネーションに一つのユートピア的な場所を提供する。そこは現在の生からつねに遠ざかり、如何に接近しようとしても、決してたどりつくことはない。このように、二重の相互作用によって、ネーションは一つの「後退しつづける地平」を提供する一方、そこから価値が不断に生成される。

第二に、ネーションの様式に関する理解が重要である。この点を理解するためにも、相互作用の視座は有効である。すでに論じたように、二重の相互作用は水平的・均質的で、かつ相互予期的な共同体の様式の生成を促す。パットナム（2001）は、ネーションを直接的な対象にしているわけではないが、次のように指摘する。「社会資本」としての「信頼、規範、ネットワーク」によって、コミュニケーション的と生産的な意味での「社会の効率性」が高められる。特に面識関係を越える「社会的ネットワーク」が、相互信頼の拡散の基盤となっているという（パットナム2001：206-207, 209）。この意味で、

水平的・均質的で相互予期的な共同体の様式としてのネーションは、面識関係を越える「社会的ネットワーク」の構築に、さらにそれに基づく相互信頼の維持に、積極的な意味を持つ。こうしたネーションの共同体様式は「社会の効率性」の向上や社会の発展に寄与できるゆえ、近代社会において中心的な共同体様式となることが可能である。

以上のように、ネーションのユートピア的な性格によって生成された共通の価値は、近代における中心的な共同体様式——水平的・均質的で相互予期的な想像の様式——を通じて、人びとに受け入れられていく。このようなネーションでは、近代（及び未来）の希望や理想を示す「価値としての倫理性」、そして人びとのつながり方を規定する「共同体としての倫理性」が生ずる。アンダーソンは、近代の世界史的過程から抽出したこのネーションを、世界の変容にかかわる一つの段階として、擁護するのである。

5 むすび

「想像の共同体」としてのネーションは、生の意味付与を担保することで、近代化によって急激に喪失感に襲われてきた人びとを救い出す。この「救済」の意味で、アンダーソンはナショナリズムを擁護する。言い換えれば、彼が擁護するのは、近代における人びとの、世界に対する認識や価値生成のメカニズムである。このメカニズムは、近代性と宿命性の相互作用によってのみ、精確に描写することができる。

この相互作用の視座は、「想像の共同体」論をめぐる批判的な議論に、新しい見方をもたらす。たとえば、アンダーソンが提示する国民国家モデルの普遍性を疑問視し、それぞれの独自性を持つ多様な地域に適用することは難しいのではないか、という批判である²¹。だが、「想像の共同体」としての「ネーション」とは、そもそも言語、伝統、自然環境のような広い意味での様々な宿命的な要素も内包しているのである。これらと近代性との相互作用の視座を採ることで、アンダーソンの思想を解釈する際に宿命的な要素の多様性を取り込むことが可能になる。

さらに本稿は、現代におけるナショナリズム問題を検討する際に、より大きな文脈で「想像の共同体」論を再考する必要性を示すものである。現代のマスメディア、ネットメディアは、近代の新聞や小説のような活字メディアと比べると、人びとの日常生活への浸透、影響の範囲、情報流通の効率など様々な面において大きな変革をもたらした。こうしたメディアとコミュニケーションの変容によって、様々な共同体の可能性も広がる。たとえば、国境を越える新たな「宗教的」共同体によるテロリズムや原理主義は深刻な国際問題となり、国際社会の不安定な要素となっている。このような越境する共同体の様式は、ボーダレスなメディアとコミュニケーションに大きく依存する²²。ネーションの想像力は、これらの新しい状況に如何に対応するのか。

▶21 たとえば高谷（1996）は、東南アジアが長い歴史と複雑な自然環境を持つため、ヨーロッパからのネーションの「モジュール」を「簡単に移植」できない、と指摘した。（高谷1996：309）。

▶22 この点に関して、アンダーソンは『比較の亡霊』の第3章「遠距離ナショナリズム」でも論じている（アンダーソン2005：98-127）。

こうした問題を捉える際に、メディアとコミュニケーションの変容などの近代的な要素は重要である一方、宗教や人種にかかわる言語、血統、出生などの宿命的な要素も無視できない。相互作用の視座には、このような課題群に対応する潜在的可能性があるのではないか。近代性と宿命性を含むより大きな文脈において、「想像の共同体」論を再考することで、これらの問題へアプローチするための手がかりを見出すことができるのではないか。

参考文献

- Anderson, Benedict. (1983=2006) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso.
- Anderson, Benedict. (2003) 'Responses,' Jonathan Culler and Pheng Cheah ed. *Grounds of Comparison: Around the work of Benedict Anderson*, Routledge.
- Chatterjee, Partha. (2003) 'Anderson's Utopia,' Jonathan Culler and Pheng Cheah ed. *Grounds of Comparison: Around the work of Benedict Anderson*, Routledge.
- Cheah, Pheng. (2003) 'Grounds of Comparison,' Jonathan Culler and Pheng Cheah ed. *Grounds of Comparison: Around the work of Benedict Anderson*, Routledge.
- 本尼迪克特・安德森 (2011) (吴叡人, 译)《想象的共同体—民族主义的起源与散布 (增订版)》上海人民出版社
- アントニー・D・スミス (1999) (巢山靖司、高城和義、他訳)『ネーションとエスニシティ——歴史社会学的考察』名古屋大学出版会
- 三溝信 (1993) “近代化 modernization” 森岡清美、塩原勉、本間康平 (1993)『新社会学辞典』有斐閣
- 高谷好一 (1996)「〈想像の共同体〉論批判：〈世界単位〉の立場から」『東南アジア研究』34巻1号
- 津田正太郎 (2016)『ナショナリズムとマスメディア——連帯と排除の相克』勁草書房
- 富永健一 (1987)『社会構造と社会変動——近代化の理論』放送大学教育振興会
- 新倉貴仁 (2007)「ネーションとステートの亡霊的な関係」『現代思想』35 (1)
- 新倉貴仁 (2008)「ナショナリズム研究における構築主義——ベネディクト・アンダーソンの知と死」『社会学評論』59 (3)
- 新倉貴仁 (2016)「「想像の共同体」を越えて——ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論をめぐる」『思想』2016年第八号
- 原百年 (2010)「ナショナリズム論——近代主義の再考」『山梨学院大学法学論集』64
- 原百年 (2014)「ナショナリティ生成の分析枠組——社会構成主義と他のアプローチの接合」『山梨学院大学法学論集』72
- ベネディクト・アンダーソン (2005) (糟谷啓介、高地薫、他訳)『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社
- ベネディクト・アンダーソン (2007) (白石隆、白石さや、訳)『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山
- ベネディクト・アンダーソン (2016) (山本信人、新倉貴仁、訳)「インドネシアのナショナリズム、その現在と未来」『思想』2016年第八号
- メレディス・B・マクガイア (2008) (山中弘、伊藤雅之、岡本亮輔、訳)『宗教社会学——宗教と社会のダイナミックス』明石書店
- 吉野耕作 (1997)『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会
- ロバート・D・パットナム (2001) (河田潤一、訳)『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT出版

(平成30年4月16日受理、平成30年7月7日採択)

